

1
南北の王
聖徒伝 113

「主による一致か 人による分断か」

列王記第一 12～14章

ユダとイスラエルの南北分裂

アウトライン

0. イントロダクション

I. イスラエルの背き 12章1～18節

II. ヤロブアムの即位 12章19～24節

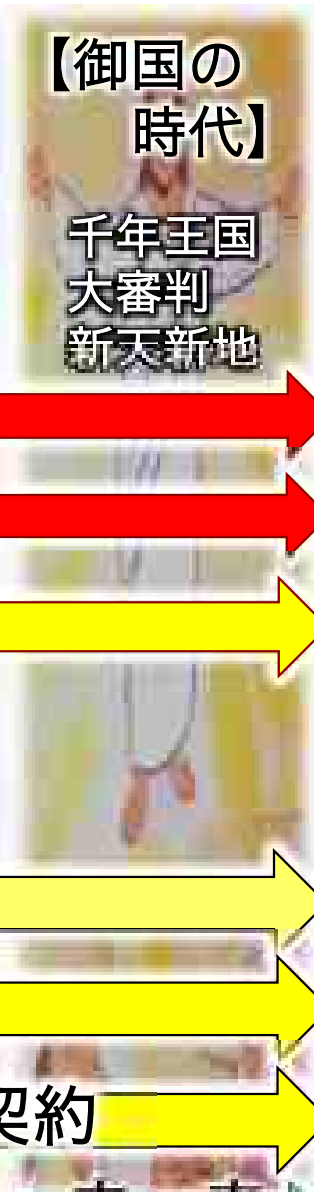
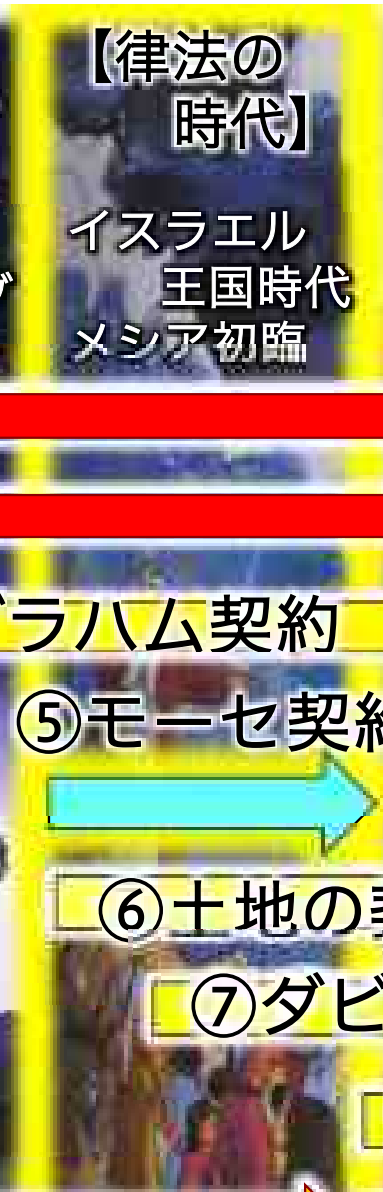
III. ヤロブアムの背教 12章25～33節

IV. まとめと適用

ただ主の約束に信頼して
真実を選び取っていこう



シェケムの丘陵



【無垢の時代】

天地創造

【良心の時代】

墮罪
~大洪水

【人類統治の時代】

バベルの塔事件

【約束の時代】

アブラハム
~ヤコブ

【律法の時代】

イスラエル王国時代
メシア初臨

【恵みの時代】

聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

【御国の時代】

千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

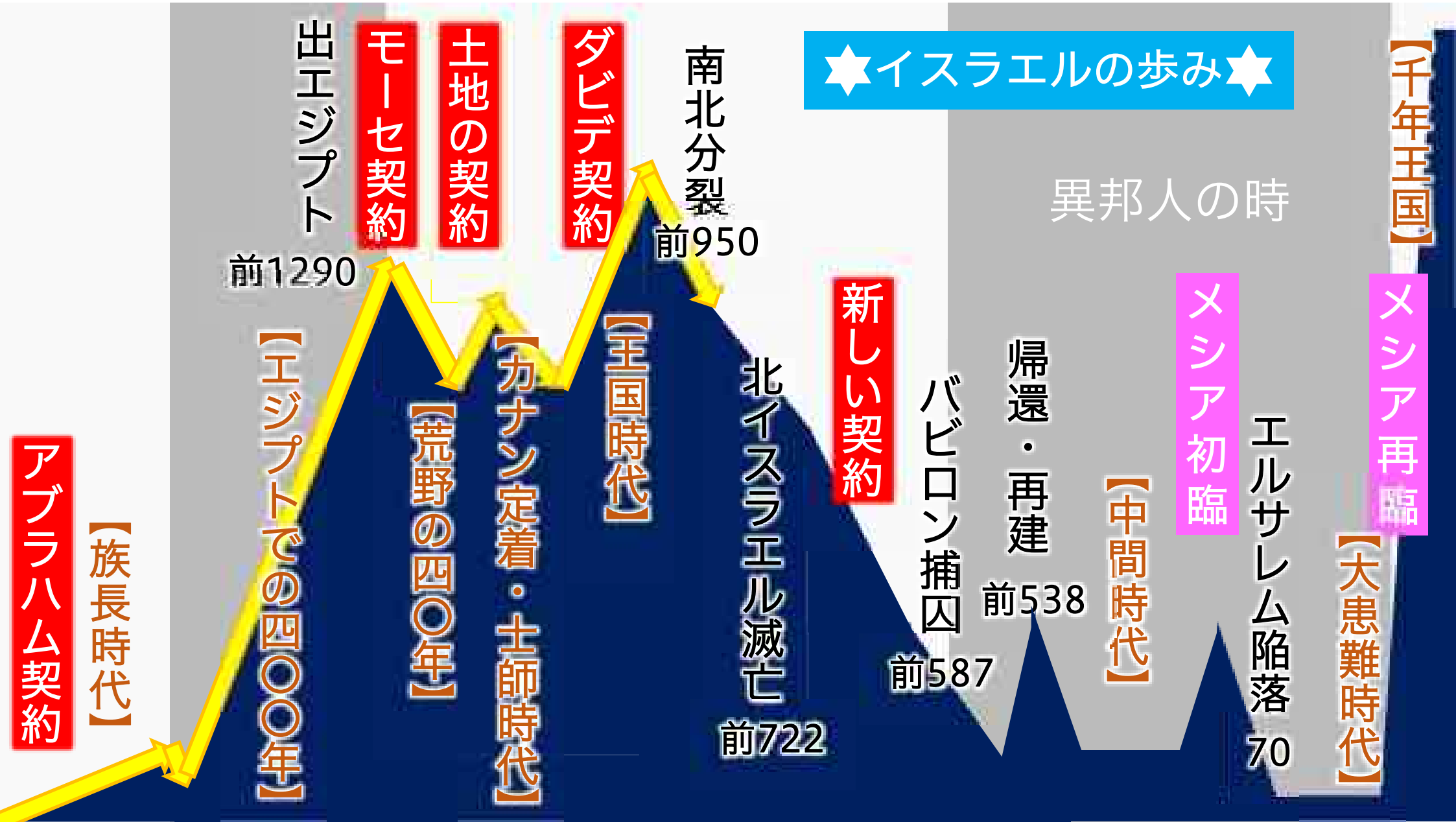
どの時代も
神の約束が礎にある

過去

現在

未来

★イスラエルの歩み★



列王記 (第一〜第二)

第一	1〜11章	ソロモン王の治世 神殿建築	イスラエル(統一王国)		
	12〜16章	王国の分裂	ユダ(南王国)	イスラエル(北王国)	
第二	17〜22章	預言者エリヤ	レハブアム アビヤム アサ ヨシャパテ ヨラム アハズヤ アタルヤ ヨアシュ アマツヤ ウジヤ ヨタム アハズ ヒゼキヤ マナセ アモン ヨシヤ エホアハズ エホヤキム エホヤキン ゼデキヤ	オバデヤ ヨエル イザヤ ミカ エレミヤ エゼキエル	ヤロブアム…ナダブ バアシャ…エラ ジムリ オムリ…オムリ…アハブ …アハズヤ…ヨラム エフー…エホアハズ …ヨアシュ …ヤロブアムII …ゼカリヤ シャルム メナヘム ベカフヤ ベカ ホセア
	1〜2章			エリヤ エリシャ アモス ヨナ	
	2〜13章	預言者エリシャ			ホセア
	14〜17章	二つの王国の歴史 北王国滅亡まで			
	18〜25章	ユダ王国の歴史 滅亡まで			

★北王国は10王朝に19人の王
★南王国は1王朝に20人の王

ソロモンの罪と悔い改め

■ 律法の警告に背き、異教徒の妻を多く娶り、軍事力を過大に増強し、私財を過剰に貯め込んだ。妻たちの**偶像礼拝**を認め、老年には、自らも偶像礼拝に取り込まれ、主から離れてしまった。

➔ 律法を熟知し、知恵を得、神の直接の警告を二度も受けながら。

■ **イスラエルの分裂**が裁きとして宣告。ソロモン存命中は猶予された。都を破壊され、約束の地を追われる最悪の事態にはならず。

■ 主の裁きの軽減の背後に、ソロモンの悔い改めがあったのだろう。

「神を恐れよ。神の命令を守れ。伝道者12:13」➔伝道者の書の結論。

ヤロブアム

- ヤロブアム = “神の民は戦う” エフライム族出身。
母はやもめ。苦労人だったのだろう。ソロモンの有能な家来だった。
 - ◆ エルサレムの重要な要塞ミロの建設責任者
 - ◆ ヨセフ族(エフライム+マナセ)の役務の管理者に。
- 預言者アヒヤから、**イスラエルの十部族の王**になると告げられる。
→ 律法を守り、主に従うなら、その王位は代々継承されるとも。
- 預言を知ったソロモンに命を狙われ、エジプトに逃亡。
ソロモンが死ぬまで、ヤロブアムは異国で時を待っていた。



Ⅰ. イスラエルの背き

Ⅰ 列王記12章1～18節

【レハブアムの即位式】 | 列王記12:1

レハブアムはシェケムに行った。全イスラエルが彼を王とするために、**シェケム***に来ていたからである。

*アブラハムが最初に祭壇を築いた。

ディナ事件後、ヤコブの所有に。

ヨセフのミイラが埋葬された。

ヨシュアが主と誓約し、律法の碑を建てた。

■ユダ族以外への配慮としてシェケムが選ばれた。

→レハブアムは長老たちの忠告に従った？



【ヤロブアムのとりなし】 Ⅰ列王記12:2～3

ネバテの子ヤロブアムは、まだソロモン王の顔を避けてエジプトに逃れていた間に、レハブアムのことを聞いた。そのとき、ヤロブアムはエジプトに住んでいた。人々は使者を遣わして、彼を呼び寄せた。ヤロブアムは、イスラエルの全会衆とともにレハブアムのところに来て言った。

- すでに指導者として迎えられているヤロブアム
➔役務長官時代に人々の支持を得たのだろう。



【ヤロブアムのとりなし】 | 列王記12:4~5

「あなたの父上は、私たちのくびきを重くしました。今、あなたは、父上が私たちに負わせた過酷な労働と重いくびき*を軽くしてください。そうすれば、私たちはあなたに仕えます。」

するとレハブアムは彼らに、「行け。三日たったから私のところに戻って来るがよい」と言った。そこで民は出て行った。

■ 神殿、宮殿、各地の要塞、道路網の整備…。

繁栄の影でソロモンが民に強いた多くの負担が。



【長老たちの助言】 | 列王記12:6~7

レハブアム王は、父ソロモンが活着している間ソロモンに仕えていた長老たちに、「この民にどう返答したらよいと思うか」と相談した。

彼らは王に答えた。「今日、もしあなたがこの民のしもべとなって彼らに仕え、彼らに答えて親切なことばをかけてやるなら、彼らはいつまでも、あなたのしもべとなるでしょう。」

■ 聖書が求める指導者は、**サーバントリーダー**—
その究極が、人となられたメシア、**イエス**。



【拒絶】 Ⅰ列王記12:8～9

しかし、王はこの長老たちが与えた助言を退け*、自分とともに育ち、自分に仕えている若者たちにかう相談した。

「この民に何と返答したらよいと思うか。私に『あなたの父上が私たちに負わせたくびきを軽くしてください』と言ってきたのだが。」

*長老たちの助言を明確に拒絶したレハブアム。

■この時点でレハブアムの姿勢は明らか。

求めているのは、自分に同意する意見だけ。



【若者たちの助言】 | 列王記12:10~11

彼とともに育った若者たちは答えた。「『あなたの父上は私たちのくびきを重くしました。けれども、あなたはそれを軽くしてください』と言ってきたこの民には、**こう答えたらよいでしょう**。彼らにこう言いなさい。『私の小指は父の腰よりも太い。

私の父がおまえたちに重いくびきを負わせたのであれば、私はおまえたちのくびきをもっと重くする。私の父がおまえたちをむちで懲らしめたのであれば、私はサソリでおまえたちを懲らしめる』と。」

■ 強硬な態度でソロモン以上の権力を振るおうと…。

王への巧みな忖度



【王の民への答え】 | 列王記12:12~14

ヤロブアムとすべての民は、三日目にレハブアムのところに来た。王が「三日目に私のところに戻って来るがよい」と命じたからである。

王は民に厳しく答え、長老たちが彼に与えた助言を退け、若者たちの助言どおりに彼らに答えた。

「私の父がおまえたちのくびきを重くしたのなら、私はおまえたちのくびきをもっと重くする。私の父がおまえたちをむちで懲らしめたのなら、私はサソリでおまえたちを懲らしめる。」

■ 表現まで若者たちの助言どおり。

支配心と依存心はコインの両面



【背後で働く主】 | 列王記12:15

王は民の願いを聞き入れなかった。かつて【主】がシロ人アヒヤを通してネバテの子ヤロブアムにお告げになった約束を実現しようと、【主】がそう仕向けられたからである。

*レハブアムの傲慢さをも主が用いられた。

■ 神の視点からは、すべて知られている。

人には、**自由意志による決断**が求められる。

■ 最終的には、神の御心しかならない。

➔ 主に従って用いられるか。

➔ 主に背いて用いられるか。

選択は二つに一つ



【イスラエルの嘆き】 | 列王記12:16

全イスラエルは、王が自分たちに耳を貸さないのを見てとった。そこで、民は王にことばを返した。「ダビデのうちには、われわれのためのどんな割り当て地があろうか。エッサイの子のうちには、われわれのためのゆずりの地はない。イスラエルよ、自分たちの天幕に帰れ。ダビデよ、今、あなたの家を見よ。」イスラエルは自分たちの天幕に帰って行った。

＊ダビデ時代の反乱者シェバと同じ言葉。

➡長年のユダ族への不満がとうとう噴出!!



【イスラエルの怒り】 | 列王記12:17~19

ただし、ユダの町々に住んでいるイスラエルの子ら*にとっては、レハブアムがその王であった。

レハブアム王は役務長官アドラム*を遣わしたが、全イスラエルは彼を石で打ち殺した。レハブアム王はやっとの思いで戦車に乗り込み、エルサレムに逃げた。このようにして、イスラエルはダビデの家に背いた。今日もそうである。

*ユダ族 + ユダの町々に住んでいるイスラエル
→ベニヤミン族と、レビ族も含まれる。

*ソロモンが任命。恨みを買うポジションだった。



命からがら逃げた
レハブアム



II. ヤロブアムの即位

I 列王記12章19～24節

【レハブアムの反撃】 | 列王記12:20~21

全イスラエルは、ヤロブアムが戻って来たことを聞いたので、人を遣わして彼を会衆のところに招き、彼を全イスラエルの王とした。ユダの部族以外には、ダビデの家に従う者はいなかった。

レハブアムはエルサレムに帰り、ユダの全家とベニヤミンの部族*から選り抜きの戦士十八万を召集し、王位をソロモンの子レハブアムのもとに取り戻すため、イスラエルの家と戦おうとした。

すると、神の人(預言者)シェマヤに次のような神のことばがあった。

*サウル王を輩出。エルサレムは彼らの領内。



サマリヤ

【避けられた戦い】 | 列王記12:23～24

「ユダの王、ソロモンの子レハブアム、ユダとベニヤミンの全家、およびそのほかの民*に告げよ。

『【主】はこう言われる。上って行ってはならない。あなたがたの兄弟であるイスラエルの人々と戦ってはならない。それぞれ自分の家に帰れ。わたしが、こうなるように仕向けたのだから。』」
そこで、彼らは【主】のことばに聞き従い、
【主】のことばのとおりに戻って行った。

*十部族からもレハブアムにつく者たちがいた。
異邦人の改宗者も含まれただろう。



同族同士の戦いは
とどめられた

Ⅲ. ヤロブアムの背教

Ⅰ 列王記12章25～33節



ダン・自然公園

【北王国の基盤】 | 列王記12:25

ヤロブアムはエフライムの山地にシェケムを築き直し、そこに住んだ。さらに、彼はそこから出て、ペヌエル*を築き直した。

*ヤコブが神と格闘したヤボク川の渡し。

■ ダビデの支持者が多かったギルガル人（マナセの半部族）への牽制や、アンモン人への防御のためだろう。

■ 当初、シェケムが都と定められた。



【ヤロブアムの不安】 | 列王記12:26~27

ヤロブアムは心に思った。「今のままなら、この王国はダビデの家に帰るだろう。

この民が、エルサレムにある【主】の宮でいけにえを献げるために上ることになっているなら、この民の心は彼らの主君、ユダの王レハブアムに再び帰り、彼らは私を殺して、ユダの王レハブアムのもとに帰るだろう。」

■ 十部族の王としたのは主ご自身。

律法を守り従えば、王位は約束されていた。

→ 己の不安から重大な律法違反を犯すことに!!



エルサレム神殿

【金の子牛】 | 列王記12:28～30

そこで王は相談して**金の子牛***を二つ造り、彼らに言った。「もうエルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上った、あなたの神々がおられる。」

それから彼は一つを**ベテル**に据え、もう一つを**ダン***に置いた。このことは**罪**となった。民はこの一つを礼拝するためダンまで行った。

***律法授与直前のシナイ山でも造った!!**

エジプトの神々の一つ。なじみ深い偶像？

***士師時代、ミカから奪った偶像を祭った。**



【偽祭司】 | 列王記12:31~32

それから彼は高き所の宮を造り、レビの子孫*でない一般の民の中から祭司を任命した。

*律法はレビ族のみ祭司職を認めた。

→ 神殿に仕えるレビ族は、
南王国に属したのだろう。

■ かつてサウル王は、自ら祭司を努め
いけにえをささげ、王位を喪失。

→ ヤロブアムも同様の重罪を!!



ダンの神殿・境内の遺跡

【北王国の祭儀体系】 | 列王記12:32

そのうえ、ヤロブアムはユダにある祭りに倣って、祭りの日を**第八の月の十五日***と定め、祭壇でささげ物を献げた。こうして彼は、ベテルで自分が造った**子牛***にいけにえを献げた。また、彼が造った高き所の祭司たちをベテルに常駐させた。

* 第7月の15日が仮庵の祭り。➡一ヶ月ずらした。

* 子牛なのは、ささげ物の価値が高いから？

■ 律法とは別の祭儀体系、組織を造り上げた。

➡できあがったのは、似て非なる偶像礼拝



【偽の祭儀】 | 列王記12:33

彼は、自分で勝手に考え出した月である第八の月の十五日に、ベテルに造った祭壇でいけにえを献げた。このように、彼はイスラエルの人々のために祭りの日を定め、祭壇でいけにえを献げ、香をたいた。

■ 聖書が記す宗教には、二つしかない。

➡ 主が定めた、真実の宗教か。

➡ 人が考え出した、偽の宗教か。



ダンの祭壇跡・元来は屋根付

求められるのは、真実を選び、真実に立ち続けること



IV. まとめと適用

ただ主の約束に信頼して
真実を選び取っていこう

【ヤロブアムの罪】

- ヤロブアムを十部族の王に召命したのは神ご自身。
律法を守る限り、ヤロブアムの王位は代々にまで約束されていた。
- 主の約束を信頼しきれず、不安に駆られ、金の子牛の像を立てた。
新しい祭りを定め、自ら選んだ民を祭司として組織した。
➡ 神の律法をねじ曲げ、自らが偶像礼拝の創始者に!!
- 根本的な過ちの上に建てられた北王国の行く末は、すでに明らか。

主の約束を信頼仕切れないところに、罪がつけ込む隙が生まれる

【北王国と南王国を反面教師に私が教えられたこと】

- 私が、かつて属していたリベラル・自由主義神学は、まさに北王国。人間の理性という偶像の上に立ち、根本から間違っている。
 - ➔ただ中で目覚めたときには、福音派(南王国)が輝いて見えた。
- いざ福音派に身を置いて直面させられたのは、混沌とした現実。
 - ➔カルト化した教会と直面。教理的曖昧さ、信仰的危うさ…。
真実と偽りが混ざり合っているだけに、むしろ難しい。
- 聖書は、北王国よりも南王国の責任をより重いものと記す。
真実を知るほどに、責任も増すのが信仰の原則。
リベラルよりも福音派、ヘブル的視点となれば、さらに増す責任。

【福音派の牧師からの批判を受けて】

- 福音派の教会と交わる中で感じた、**聖書の学びの機会の乏しさ**、語られない終末論、ゴールの見えない信仰生活を送る人々…。
- 度々耳にする聖書フォーラムへの批判。ほとんどは牧師からのもの。最も問題とされるのは、“信徒が牧師の許可なく学べること”
 - ➔背景には、地域教会の枠を越え、いくらでも学べる**時代の変化**
- いくつかの議論を経て感じたのは、**激変の時代**への牧師の焦燥感。“特定の終末論を正しいと断定するな” という主張の背後には、わかりやすく終末論を教えられないという、厳しい現実が。

【福音派にある混沌の根っこは？】

- 終末論は、使徒の時代には、“初歩の教え”にすぎない(ヘブル6:1)
 - ➔ゴールの見えない信仰生活では、成長もおぼつかない。
- 根をたどれば、**イスラエル論**の喪失に行き着く。
教会がメシアニック・ジューを占めだし、異邦人中心となった末に、イスラエルを教会を読み替える**置換神学**が、3世紀頃には主流に。
比喩的解釈とは、解釈者の好き勝手な聖書理解に他ならない。
- 文脈を無視したら、聖書は分からない。
イスラエルという最大の文脈を喪失した教会の悲劇がある。

【混沌とした南北時代から、なお教えられる神の約束の確かさ】

- アブラハムへの約束もダビデ契約も生きている。
背教の末、約束の土地を追われ、回復されることは当時も既知。
- この時代に次々と現れる預言者は、さらなる将来の希望を示した。
メシアの登場と、メシアによる**永遠の王国**が建てられることを。
- 世の闇が深まる中で浮かび上がる、**神の約束の不動の確かさ**。
混沌の時代から私たちが捕らえるべきは、
背後を貫く**主の計画**。ご自身の民をなお支え導き続ける**神の御手**。

【2022年も変わらず歩み続けるために】

- ますます混沌を深める世界。確かな未来予測は世界的人口減くらい。何が起ころうとも、起こるまいとも、これまで以上に、**ひたすら聖書にかじりついていこう。**
- 日々のデボーションを大切に、**主に聴く時**を保ち続けよう。移り変わりも激しい時代、示されたことに、すぐさま取り組もう。主への信頼を、**行動をもって具体的に**現していこう。
- エルサレムの平和、すなわち、**ユダヤ人の救い**を祈り、ささげよう。イスラエルへの確かな約束に、私たちも接ぎ木されて今がある。

- 「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、
- ①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、
 - ②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、
 - ③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

イスラエルのメシアは来られ、み業(わざ)をなしとげられました。
きたるべき日に、主の告げられたすべては成就(じょうじゅ)します。
示(しめ)されたゴールに向かって、たしかに今を歩ませてください。
変わらずみ言葉を慕(した)い求め、よろこびをもって学び、
キリストの似姿(にすがた)へと 変えられていきますように。
主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」